

化学療法を施行した。

過去7年間に当院における重複癌は10例（5.5％）に認められた。重複癌は近年増加傾向にあり、殊に頭頸部癌には重複癌が高頻度に認められ、外科的には上部消化管のスクリーニングが必要である。

27. 外傷性横隔膜ヘルニアの1例

榊原雅裕, 漆原 徹, 大森敏生
片岡雅章, 黒沢 久, 横山孝一
(県西総合病院)

今回当院では、被膜下脾破裂を合併した外傷性横隔膜ヘルニアの一症例を経験し、待期的手術により良好な結果を得たので報告する。症例20歳男性、主訴：呼吸困難および腹痛。現病歴平成6年12月30日、乗用車の左後部座席に乗車中ガードレールに衝突し、胸腹部を強打、当院外科に搬送された。入院時の諸検査にて外傷性横隔膜ヘルニア、被膜下脾破裂と診断。胃管チューブの挿入にて胃内容を吸引することで呼吸困難は改善し、脾臓温存を考慮し経過観察。遅発性脾破裂の危険のなくなった18病日左閉胸による手術施行。15cm×10cmの破裂部位を縫合した。患者は手術後3週間で退院した。

28. 悪性腫瘍に対する化学療法・高圧酸素併用療法の治療効果 - 実験的検討 -

滝口伸浩, 古山信明
(千大・中央手術部)
樋口道雄, 千見寺勝 (斉藤労災病院)

Sarcoma180皮下移植マウスを用いて5FUに対する高圧酸素療法(HBO)の併用効果を検討した。5FUは0.75mg/body/dayで週6回腹腔内注射し、HBOは週6回計17回施行し治療終了とした。

腫瘍内5FU濃度はOF(HBO+FU)群でF(FU)群よりも高かった。腫瘍径の変化、組織学的変化からはOF群で、O(HBO)群、F群、C(対照)群にたいし抗腫瘍効果の有意な増強が認められた。さらに生存期間の延長がみられ、HBO併用5FU療法の有効性が示唆された。

29. 当院における在宅ターミナルケア

宮尾陽一, 古谷成慈, 横山 宏
(町立榊井沢)

末期癌患者のQOLの向上を目ざして、在宅でのターミナルケアにとり組んでいる。当院での約4年半の実績をまとめ、我々の行っているいくつかの工夫を紹介した。特徴として、1)出来るだけ正直な病状説明に努め、I, C, の文章化を試みていること。2)在宅ケ

アを可能にしQOLを向上させる手技上の工夫。3)緩和ケアと癌治療を一連のものとしてとらえ、患者、家族と作業を共有化する事で、支援としての医療を模索している点。を述べた。

30. 「術前門脈塞栓術を施行し、拡大右葉切除を行った肝門部胆管癌の1例」

黒岩教和, 田中寿一, 土屋俊一
山口敏広, 海保 隆, 柳沢真司
北方勇輔 (君津中央)

症例は72歳の男性。肝門部胆管癌と診断されたが、閉塞性黄疸あり、C型慢性肝炎、糖尿病などを合併しており、胆予備能不良と判断され肝切除に耐術は困難と予想されたために、術前に門脈塞栓術を施行した。その結果、確実な塞栓効果が得られ、残存予定領域の再生肥大を認め、拡大肝右葉切除術にも耐術しえた。門脈塞栓術は、肝切除の適応の拡大と安全性の向上を図る上で有効な手段と考えられる。

31. 特発性門脈圧亢進症を合併した総胆管嚢腫の1例

浅倉博幸, 大坪義尚 (千大)

特発性門脈圧亢進症を合併した総胆管嚢腫の1例を経験したので報告する。症例は63歳、女性。門脈圧亢進症と診断され食道静脈瘤に対し内視鏡的硬化療法施行後経過観察されていた。その後の検査で総胆管嚢腫(戸谷Ia)と診断された。血小板減少のため部分的脾動脈塞栓術を施行したのち、嚢腫切除術、脾摘徐術、胆管空腸吻合による再建術を施行した。病理で悪性所見は認めなかった。術後経過は良好である。

32. 肝転移を来した卵巣原発悪性黒色腫の1手術例

登内昭彦, 宮崎 勝, 安藤 聡
清水宏明, 奥野厚志, 中島伸之
(千大)
高野 始 (同・産婦人科)

今回我々は、非常に稀な卵巣原発の悪性黒色腫の肝転移に対し外科的切除を施行した。本疾患は極めて稀で予後不良である。肝転移巣に対して化学療法がある程度有効性を示し得たが、肝切除標本の検索では病理学的にviable tumorであった。肝に限局し切除可能であれば積極的な肝切除を行ない、化学療法を含めた集学的治療により予後の改善を図っていくべきと考えられた。